

まちづくり・随想

みき市長(兵庫県) **藪本吉秀**

Yoshihide Yabumoto



日本一美しいまちをめざす

私が生まれ育った三木市は、古い歴史と豊かな自然に恵まれたまちです。

昭和29年に市制を施行し、平成17年には吉川町と合併。豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、酒米の王様といわれる「山田錦」の日本一の産地として知られるほか、古くから金物のまちとして栄え、歴史的な町並みが残っています。

わが家からは、はるか六甲山系を望むことができ、眼前には名峰丹生山が悠然と鎮座しています。毎年、元日の朝、丹生山から昇る初日の出を拝み、人生の夢を描いて



秀吉本陣跡から一望した市内

きました。

私は、このまちの美しさ、三木の地に住む人々の温かい暮らしぶりを「三木景色」として捉え、まちを愛し発展させていこうという姿や志を日本一に高めたいとの想いを成し遂げるため、「日本一美しいまち三木」を将来都市像に掲げてまちづくりに精進しています。

また、市内には多くの神社があり、氏子によって30基以上の祭り屋台が継承され、毎年勇壮な秋祭りが市内各所で催されます。私もこの時期になると、播州人としての血が騒ぎ、祭り屋台の担ぎ手となって五穀豊穡と市政の発展を祈願しています。

特に、昨年は市制施行60周年を迎え、10年ぶりに「三木の祭り屋台大集合」を開催しました。市内各所から集まった豪華な28基の祭り屋台が一堂に会して行った勇壮な練り合わせを見たときには、会場の迫力と三木の市民の心意気に感動のあまり涙が溢れそうになりました。

六甲全山縦走とカラオケ

私は、丹生山を見て育ってきた影響か、今でも山歩きが大好きです。自然豊かな山



「三木の祭り屋台大集合」の壮観な光景

の懐に抱かれてみると、山から「生きる力」がもらえるような心地になり活力がみなぎります。

三木市長に就任する前は、身体と精神を鍛えるために六甲全山縦走に参加していました。縦走コースは、六甲山系の西端の塩屋（神戸市須磨区）から宝塚に至る約56kmで、12〜15時間かけて歩きます。早朝のピント張りつめた空気の中、須磨浦公園をスタートし、文字どおり山あり谷ありのコー

スを紅葉と絶景を楽しみながら、時には岩場に足を踏ん張りながら自然とふれあうとともに他の参加者との交流を深めて歩きました。毎年参加していた頃は全コースを12時間のハイペースで完走したこともありましたが、完走した時の心地よい疲れと充足感という言葉では言い表すことができません。

市長に就任してからは、公務のために山歩きをする時間がなかなか取れないため、市内のウォーキングイベントに参加したり、市役所の近くにある県立三木山森林公園でウォーキングをしたりしています。起伏に富んだ六甲山と同じように、三木山森林公園にも四季折々の景色が楽しめる素晴らしいウォーキングコースがあります。



カラオケでの成果を披露する筆者

また、「カラオケ」も大好きです。カラオケは、脳の活性化や若返りに効果があるともいわれています。お腹の底から大きな声を出して歌うと日ごろのストレスが一気に吹き飛びます。最近では、時間を作って友人などと一緒にカラオケボックスに通って楽しんでいきます。時には、敬老会や文化祭などで特別ゲストとして歌を披露することもありますので、練習にもなっています。三波春夫さんの「元禄名槍譜 俵屋玄蕃」や「元禄花の兄弟 赤垣源蔵」をよく歌っています。

ウォーキングとカラオケによって運動不足とストレスを解消するとともに、食事もできるだけ野菜を中心としたものを心掛け、体力をつけるとともに健康を維持し、市長としての職務を全うしていきたいと思っています。

これから50年

さて、私の生まれた昭和33年ごろの本市は、人口4万人に満たない小さなまちでしたが、人を思いやる優しい心、発展への強い志が満ち溢れていました。その後、高速道路網の整備や神戸電鉄粟生線沿線でのニュータウン開発などにより、8万5000人のまちになりましたが、還暦の節目を迎えた今、少子・高齢化の真っ只中にあり、人口減少が続いています。一刻も早く、人口減少に歯止めをかけ、総合戦略

による具体的な施策に取り組み、「三木の『創生』」を成し遂げていきたいと考えます。時々刻々と変化していく社会情勢の中、本市の個性をどう生かし、どう生き残っていくか、まち全体を見通して最善の道を探り、10年、20年先を見越したまちづくりを進めていかなければなりません。その道は険しく、時には心がくじけそうになることもあります。

そんな時、私は壁に掲げた「六然訓」という言葉を読み返しています。

「自処超然（自ら処すること、超然）、処人藹然（人に接すること、藹然）、有事斬然（有事の時には、斬然）、無事澄然（無事の時には、澄然）、得意澹然（得意の時は、澹然）、失意泰然（失意の時は、泰然）」

この言葉は、崔銑という中国古代の学者が残したといわれており、勝海舟や安岡正篤（陽明学者・思想家）も座右の銘としていた言葉です。この中には、とても大切な教えが詰まっており、私は人生の道標として常に心掛けて行動するようにしています。こうありたいと思いつながら、なかなか理想に近づくことができませんが、思い続けることで変わることができると信じています。

これからも、「六然訓」を胸に、三木のまちのかじ取り役として、市民の皆様とともに希望の持てる未来を切り拓くために全力で取り組んでまいります。